

都市の時間、農村の時間 — 近代日本の時間意識



横浜国立大学経済学部教授 大門正克

腕時計の歴史

1960年代の半ばに中学生になった私は、親戚などからお祝いを3つももらった。辞書と万年筆と腕時計である。万年筆も腕時計も当時の中学生にとっては何やら晴れがましく、少し大人になった感じがした。腕時計をして時間をつねに確かめる、鉛筆だけでなく万年筆でも書けるようになる、これは大人として必要なことのように思われていたからである。

腕時計の歴史は19世紀後半のヨーロッパにまでさかのぼる。当初は女性用の装身具として使われた腕時計が普及するきっかけになったのは戦争であった。第一次世界大戦で塹壕を掘り、突撃する戦法がとられたとき、難しかったのは大勢の兵隊をいっせいに突撃させる方法であった。この問題を解決したのが腕時計であり、指揮官に腕時計を持たせることでいっせい攻撃を可能にした。

日本でも日清戦争に従軍した日本兵の写真に腕時計が写っていた例がある。また、山形県金山町出身で日露戦争に従軍した兵隊が腕時計をはじめ知り、帰村後、村の人たちに説明したものの、なかなかうまく伝わらなかったという話がある(内山節『子どもたちの時間』岩波書店)。

腕時計は、1898年に日本の人口の4.2%に、1908年には10.0%に普及したという推計があるが(内田星美「明治時代における時計の普及」橋本毅彦ほか編『遅刻の誕生』三元社)、正確なところはわからない。戦争などを契機にして軍人が持つようになり、資産家や地主からそれ以下の階層へ、都市から農村へと徐々に普及していったように思われる。そして私が中学生になったころには、先のような時間意識と一体になった腕時計が一般化していたのではないだろうか。ここでは、腕時計を必要とするような時間意識がどのように形成されてきたのか、その点を都市と農村を対比しながら検討してみたい。

近世の時間

腕時計よりも前に普及したのは柱時計などの機械時計であり、明治期には時計による定時の時間がひろがっていた。ただし、時間を知ることが社会に組み込まれていたのは何も近代がはじめてではなく、すでに近世には時太鼓や時鐘などによって時を知らせる方法がひろく使われていた。

たとえば、現在の山口県に当たる萩藩では、17～18世紀に時間の重要な画期があり、そこでは武士の時間、職人の時間、農村の時間の3つの時間が流れていた(森下徹「近世の地域社会における時間」、前掲『遅刻の誕生』)。

萩藩では、18世紀に入ると時計師をかかえて時計を製作させている。藩の時計はまだごくわずかであったため、城内から時太鼓や時鐘によって時を知らせる方法は日の出から日没を基準にした不定時法によっていた。領主は時間の管理を自覚しており、武士＝役人の日々は時間によって区切られていた。当初、この区分はごく大まかなものであり、たとえば蔵元に詰める諸役人の出勤時間は朝六ツ過ぎより五ツまでとされていたが、これは日の出からしばらくの間に出勤せよというに等しく、武士にあっても時間を守るという意識はまだ希薄であった。こうした時間管理は、18世紀半ばにかけてしだいに厳密になり、領主は出勤時間を朝五ツに定めて遵守するように求めている。

萩の町では、武士の時間とは別に職人の時間があった。17世紀後半の職人は日の出から日没まで1日丸まる拘束されるような労働をしていたが、18世紀半ばになると、時間で労働をはかり、それに応じて賃金を受け取るような労働スタイルにかわった。

城下の周辺の村々に時鐘が設置されたのは17世紀後半のことであり、農村部では町とまた異なる時間が流れていた。このように、萩藩では17～18世紀に時間意識の大きな画期があったこと、都市では時間の活用が徐々に細かになったことを確認

しておこう。

興味深いことは、その後、萩藩を流れた複数の時間が1つに統一される事態が出現したことである。1842年、萩藩は幕府に対して城下への時鐘の増設を上申した。これは東アジアにおける対外緊張の高まりに対して軍事動員を強化するためであり、その結果、藩内の複数の時間は城下の時鐘に一本化されることになった。もちろん、ここからすぐに藩内の時間が均質化されたわけではなく、実際には複数の時間がその後も流れていたものと思われるが、近代の出現が時間の画一化を進める大きな画期になったのである。

都市の時間

時計の普及は、不定時法から定時法へ転換する大きなきっかけとなった。日の出から日没までを基準にした不定時法は、時間が地域ごとに流れていることを示している。時計時間により、地域ごとの時間から画一的な時間への転換が促された。1872年の太陽暦の採用は、現在でいえばグローバルスタンダードに時間を合わせることであった。明治以降の時間とは時計によって計測された均質な時間であり、世界へと接続された時間であった。

こうした時計時間がひろがったのが都市であった。写真1は、大阪四つ橋の交差点に設置された時計であり、写真2は東京府庁舎の時計である。東京府庁舎は1894年に現在の東京有楽町駅近くに建設された。写真1は明治末、写真2は明治後半のものであり、都市では明治半ばから末のころになると人が多く行きかう場所に時計が設置され、時間を知ることができるようになっていた。

写真3は明治末の日比谷図書館内の時計である。明治初期の図書館では、近世以来の音読が認められていたが、明治半ば以降、他の人の読書の妨げになるという理由で音読が禁止され、読書は黙読の世界へと変わっていった（永嶺重敏『雑誌と読者の近代』日本エディタースクール出版部）。図書館は、個々人が時間を確認しつつ黙読する空間として形成されていったのである。

鉄道や工場、会社、学校など、近代に入ってから都市を中心にひろがった新しい領域では時計による時間の管理が不可欠であり、それが時計と時計時間を普及させるきっかけになった。

農村の時間

これに対して農村では、太陽暦の採用後も長い間、近世以来の太陰暦による時間が流れていた（詳しくは、大門正克『明治・大正の農村』岩波ブツ

クレット、参照)。

1年間を単位とした農業労働のリズムは各地域の農村で共通性を持ち、村では農業の節目に年中行事を設けて、年中行事と農業労働による暦がつくられていった。各地域の生業のリズムと結びつき、民俗学のいうハレとケのリズムが流れていた時間、これが太陰暦であった。太陰暦と不定時法によってつくられていた近世の時間は、自然のリズムに寄り添ったものであり、農業労働のリズムによって1年間がくり返される時間であって、いわば循環する時間であった。

太陰暦は、このように農業労働のリズムと一体化していたために、近代に入って太陽暦が採用されてもすぐに廃止されることはなく、実際には明治以降も長く使用されていた。たとえば、新潟県下の農村で明治後期に作成された報告書(『村是』)によれば、この段階で太陽暦を使うのは役場と学校ぐらいであり、村の生活では太陰暦が圧倒的だと記されていた。そもそも、この報告書自体、村の1年を太陽暦と太陰暦の両方を用いて記載しており、太陰暦がまだひろく使われていたことを示している。太陰暦は、農業労働とかかわる自然への信仰・経験・言い伝えなども深く結びついており、容易にこわれるものではなかった。

ところで明治政府が採用した太陽暦は、地域ごとに存在していた旧暦社会を廃して新しい時間の全国的統一をめざすものであった。太陽暦は、三大節を中心にした国家的行事と学暦(小学校教育)によって組み立てられていた。三大節とは、1月1日の四方拝、2月11日の紀元節、天皇誕生日の天長節のことであり、近代天皇制国家の形成にかかわることであった。これに宮中行事だった春秋の皇霊祭・新嘗祭・神嘗祭などが国家祝祭日として加えられた。

明治政府からすれば、太陽暦採用後も根強く残る旧暦社会は批判の対象にほかならず、日露戦後の地方改良運動では太陽暦の徹底と国家的行事の定着がはかられた。そこでは、地域の休み日が国家祝祭日に置き換えられたり、地方の名望家が旧暦の正月よりも新暦の正月を盛大に祝ったりするなど、太陽暦を軸にした時間のリズムがだいに浸透していった。それでも、1916年に至っても、

国家祝祭日を知らないものがあることを「国民の本分を怠りたるもの」と嘆いた村もあった(新潟県中蒲原郡田家村)。国家祝祭日の浸透には時間がかかったのであり、日露戦後から第一次世界大戦後にかけての時期は、旧暦による生活リズムに太陽暦によるリズムが加わった近代日本固有の生活リズムがつけられたといえることができる。

時間の比較史

以上の農村に対して、都市や工場では近世の時間から近代の時間への転換がスムーズに進んだのだろうか。

この点で参考になるのが、E・P・トムソンとT・C・スミスの議論である。トムソンは、イギリスにおける産業革命の工場であらわれたラダイト運動(機械打ちこわし)を時間規律への摩擦という点から注目した。それまで自然に依存した生活を送っていた人びとが工場で働きはじめたとき、機械がつくりだす時間の規律に強い身体的アレルギーをおこした。それがラダイト運動であり、トムソンは時間規律にともなう文化摩擦は近代初頭にひろくみられた特徴だと指摘した。

これに対してスミスは、トムソンの解釈にあてはまらない事例として日本があると指摘し、近世の農書から農民の時間観念を検討した。そこでは家と共同体のために時間を計画して管理する意識があらわれており、日本では工場の時間を受容する基盤が存在していたと述べた(トムソン、スミスの議論は、スミス<大島真理夫訳>『日本社会史における伝統と創造』ミネルヴァ書房、参照)。

たしかにスミスがいうように、近世の農民は家族経営を維持するために時間を計画して管理する意識をある程度持っていたように思われる。ただし近世の農民は、あくまでも不定時法による太陰暦の世界に属しており、そこから定時法による太陽暦の世界へと移るのは大きな飛躍が必要であったように思われる。明治以降の農村で太陰暦の世界が容易にこわれなかったのはそのためであった。

工場の時間、学校の時間

現在の研究によれば、日本の産業革命では、イギリスのような機械打ちこわしは見あたらない。

今のところ確認できるのは、繊維工場で働く女工たちに逃亡がみられたということであるが（東條由紀彦『近代・労働・市民社会』ミネルヴァ書房）、機械打ちこわしと逃亡では自ずと相違があり、日本ではイギリスのような時間規律に対する摩擦は表面化しなかったように思われる。

ではなぜ日本では時間規律への摩擦が表面化しなかったのか。この点で私が重要と考えているのは学校の時間である。一般に欧米で公教育制度が登場するのは日本と同様の1870年代以降のことであり、公教育制度は日本のように近代の初期にすぐ登場したわけではない。フランスで教育機関が教会から学校へ転換して公教育が成立するまでには1世紀近くの時間を要しており、この点からすれば近代の初期に公教育が重視され、各地域に小学校が設立されたことは、日本の近代を特徴づけることとしてあらためて注目していいように思われる。

小学校についてここで注目したいのは学校の時間である。ここでは、学校の時間を検討するために、東京府北多摩郡田無町の例を紹介してみよう（大門「教育の普及と子どもの生活」『田無市史』通史編）。

学校の時間の成立に大きくかかわったのは学級編成であった。田無小学校では、明治前期まで複数の学年を一緒にして授業が行われていた。江戸時代の寺子屋に似た形式である。これに対して、田無小学校の尋常科が各学年1クラスずつに編成されるのは、生徒数が増加した1900年のことであった。これ以降、同じ学年の子どもが同じ内容の授業をいっせいに受けることになる。子どもたちは、授業と休みがくりかえされる時間のなかで学校生活を送った。学校の時間は太陽暦と定時法、規律によって成り立つ。規律まで含めた時間の使い方は、従来の地域社会になかったものであり、近代以降、あらたに導入されたものであった。私は、近代日本に太陽暦や定時法、時間規律が浸透するうえで、早期に普及した小学校がはたした役割は小さくなかったと考えている。

地域と融合した時間

ただし、学校の時間を太陽暦と定時法、規律だけで位置づけることはできない。近代以降の農村

で太陰暦が長く残ったように、小学校が地域社会に定着するためには、地域の時間との融合が必要であった。田無小学校の場合、村方鎮守のお祭りと試験実施日が重なった1877年にはお祭りの延期を申し入れていたが、1901年には逆に秋祭りの日は学校を休みにしている。戦前から戦後のある時期までの小学校では、農繁期を休みにした例が多かったように、小学校は地域の時間のリズムと融合することで定着をはかったのであった。

この点は実は工場も同じであった。農商務省が1903年に作成した『職事情』によれば、製糸業や織物業、麦稈真田や花筵などを製造する在来産業などの場合、農村周辺の工場や、力織機ではなく手織機を使った工場では、労働時間が地域の時間に沿っていることが少なくなかった。そこでは、始業と終業の時間が日の出から日没までで、季節によって労働時間が異なっていたり、休業日には新暦の年末年始だけでなく、旧暦の正月や町村の祭日、五節句などをあてていたりする例が多かった。

以上からすれば、近代日本では小学校が時間の規律にとってはたした役割の大きさが想定できること、とくに太陰暦と不定時法の時間が残っていた農村に近代の時間を持ちこむうえで学校は大きな役割をはたしたこと、ただしその小学校も地域の時間との融合のうえに成り立ったのであり、この点は地方にあったり規模の小さかったりする工場でも同じであった。

近代日本の時間意識

冒頭の私の体験に戻れば、腕時計を必要とするような時間意識は、定時法と時間規律によってつくられるものであり、これらは近代社会を通じてひろまったものであった。近代日本の時間意識には、定時法と時間規律に、さらに太陽暦と国家祝祭日が加わっており、時間は近代天皇制にもかかわっていたことに留意しておきたい。

ただし、こうした近代日本の時間意識はそれまでの時間意識を大きく転換させるものであった。近代日本の時間意識が浸透するうえで媒介項になったのは、学校や工場の時間と地域の時間が融合した世界であり、とくに農村では学校の時間と地域の時間の融合が大きな役割をはたした。